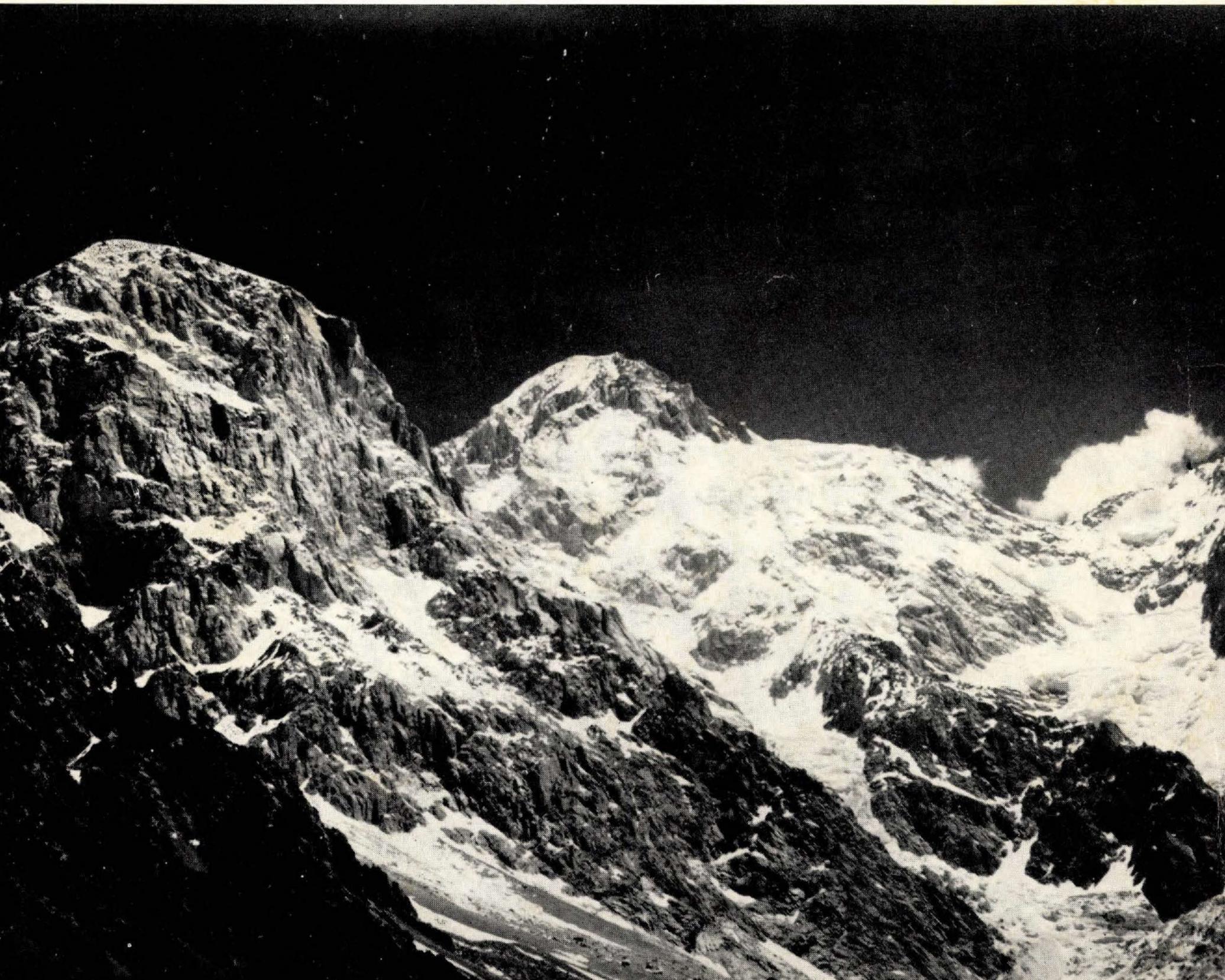


# 針葉樹會報

復刊第27号





発行日 1970年7月15日 発行所 針葉樹会社 印刷所 錦光社	針葉樹会報 復刊 第27号	編集人 東京都台東区台東 3-20-6 平川紀男
---	------------------	-----------------------------------

# 雨巻機

中川孫一

## 序 曲

巻機行はどうしてこうも雨に祟られるのだろう。第一回は去年（昭和四十三年）の九月八日、山田から電話がかゝつて、夏（五色追悼山行）の約束の巻機へ行きませんか、中島も一諾ですからという。屈強な仲間なので二つ返事で承知した。車中で中島が、明日はこゝを登りましょうと一冊の雑誌を見せてくれた。表紙を見ると新潟高枝山岳部の機関誌で筆者は鹿島槍で墜死した中村慎一郎君、仲間と同行して米子沢を登っている。巻機の一般ルートではない沢登りのバリエーションで滝が五つ六つある。これは大変なことになった。文字通り吊し上げになることは必定だが、中島の馬力で何とかしてくれるだろうと半信半疑だった。六日町からタキシイで清水の泉屋に着くと、車を降りたトタンに晴れていた空から俄に大夕立がやつてきた。じき止むだろうと、たかを括つて室に通つた。

夕食を終つて酒になつた。山田持参のブランデーを空にして尙足らず、次から次と地酒の徳利がならんだ。

話題はナント、中村君の遭難で知合になつた彼の姉を嫁さんにもらえという山田の口説である。本人から手紙が来ているのはお前一人じゃないか、俺も両親から頼まれたし、ホントに良縁だと思つたと繰返す。窓外の雨は一向に熄みそうもなく、室内の説得は延々と続く。夜は段々と更け、徳利は更に数を増したが、肝腎の花婿候補はイエスともノーとも云わない。十二時近く寝についた。（この結末は山

## 目 次

雨巻機……………	中川孫一	(1)
一九六九年の登山記録……………	近藤恒雄	(4)
山行記録		
（一九六九・一〇一九七〇・一一）望月達夫		(5)
六九年の山行記録……………	久保孝一郎	(6)
瓶が森……………	岡田健志	(7)
エベレスト便り……………	中島寛	(8)
会員一九六九年行表……………		(10)
会務報告……………		(15)

田媒酌人で終曲となる)

夜が明けてもまだ降っている。大変な夕立である。到々七時が過ぎた。もうタイムアップ、米子沢は放棄、コースは宿願(私)の清水越にしようときまった。すると皮肉にも、うらゝかに朝日がさしてきた。何ということ巻機はやり直した。 (十月、両君は懸案を果した由)

### 本 曲

去年は紅葉に早すぎた。今年十月十日の体育の日を選んで飛石連休で紅葉見物と出かけた。割引沢―天狗屋根―割引山―巻機山―檜ノ段という一般ルートを選び、十日は清水の泉屋に早着したので二時過からコースの下検分に出かける。高みにはガスがかゝっているが、天候は段々よくなるという予報に期待して、明日(十一日)にかける。

六時出発、空はどうも険悪だが、雲は西から東へと動いているので、やがて晴れるだろうという期待を裏切って割引沢を渡る頃から大粒の霧雨になった。しばらくすると小止みになったのでそのまま進む。吹上滝、藍瓶(一〇〇米ほどの滑滝)を過ぎ、ヌクピ沢、出合(割引沢との)から天狗岩下まで川原を

つめた。天狗岩はスツボリガスに包まれて裾だけが見えていたが、天狗岩下までくると、割引沢一面ガスに包まれてしまった。時に十時。これじや雨巻機だ。やり値しと廻れ右したとき、六、七人の若者のパーティーが登ってきた。私は戻る、あなた方はどうするかときくと、リーダー格の若者が、私はこのルートを二度登った経験がある。案内します。且那行きましようという。他の一行は、初心者らしいが、単独行の私にとつては気強い。さらば登高と思い直す。リーダーはそのまゝ河身を登る。オイ、屋根に取付くのはどこだといえ、登り初めのヤブ潜りがヒドイから、できるだけ沢を詰めてから、尾根に取付きますという。其まゝ進むと、兩岸は廊下状となつて、もう沢通しは不可能になったので、右手(左岸)のヤブに取付く。霧雨でピツシヨリのヤブ漕は、国師以来三十何年振だ。尾根はそう高くはないらしいから、四十分は続くだろうと腹をきめて間もなく、路に出た!と先頭の声、全く幸運か、カンの良さか、立派な尾根道に出た。が雨は大粒になってきた。しかし風はなく、変に暖かいし、頭上は明るく今にも雲が切れそうに思われる。一六〇〇mあたりらしく登りは延々と続く。紅葉は最高つめた。ナ、カマドが一きわ赤い。晴れたら越後の山々は一望の下だろう。難関を切抜けた若者達一行は、すっかり元気になってドンドンピッチが上がる。こちらはとても息が切れて続かない。もう一本道だから大丈夫ゆっくり来て下さいというリーダーに別れを告げる。見る見る一行はガスの彼方に消え去つた。しばらく進みや降り気味になるとヒョッコリ小さな池塘が現れたまわりは短い岳芝で美しい。天狗池である。午後一時は、三時間づつ続けに頑張つたので、ひどく空腹だ。割引山までの一ト登りはとても無理だと思い、立つたまゝで握飯をほゞばり、天狗池にのどをうるおす。こゝから笹の急登一しきりで倭樹帯となりやがて、壊れた三角櫓を頭上に仰ぐとそこが割引山頂(一九三〇m)だった。小さな石の祠、基、一面のガス。バラバラと初雪。展望皆無。早々に巻機に向う。一面のカヤト。一旦ゆるく鞍部(ヌクピ沢ルートの終点)に下つて、又ゆるく登りつめると巻機山頂だった。牛カ岳から裏巻機へのルートが霧の彼方に消えている。二時十五分。五時半までには清水へ戻る予定だ。休む間もなく、スキートのグレンデにしたら、さこそと思われる岳芝と笹の大斜面を下りきって上ノ池の池塘を過ぎ、

終 曲

(一) ルート(一般向)

A・ヌクビ沢ー沢通しのルート、ゴロロ  
伝いだが一番快適で、巻  
機と割引の鞍部へ登る。

B・割引沢ーヌクビ沢との出合から天狗

岩の下を通り、天狗尾根を  
登り天狗池から割引へ直登。  
展望が良い。

C・檜六段ー尾根通しの不愉快なルート。

雨になつたら、物凄いだろ  
ンコ。降路として一番早い  
(三時間)が取柄。

D・米子沢(滝のある沢登り。ザイル必

要)山田、中島のパーテイ  
が登っている。

(二) 足。六日町ー清水のバスは、十四本中四

本だけが清水直通。しかも  
十月〜三月(秋・冬季)は  
清水終発(六時。一〇分)  
が運休になる。同行三人以  
上ならば、往復共にタキシ  
ンがよい。駅前の六日町タ  
キシンを、清水の泉屋で呼  
んでくれる(三十分、

(三) 宿。泉屋、小野塚(泉屋の隣)清水峠が越後と

江戸との参勤交代ルートだった頃の本陣、  
脇本陣だった家。

一泊三食九〇〇円、酒一本七〇円は安い。

今夏から電話直通(ダイヤル・塩沢

(〇二五七八)二一八七四四)になった。

若い女房は行儀が良く、親切な 稀の別嬪。

私のドロンの靴を洗い、ビリビリに裂け

たズボンを、タキシンを待して縫ってくれ

た。

宿帳。三月二十日に一橋の学生石井康男外三名が

巻機に登っている。スキー登山だろう。

九七〜八%が二〇才台。稀に三、四〇才台。

そこで一橋大学山岳会OB会長と署名した

ら、翌朝「一橋大学の先生ですか」ときか

れた。

老翁心。夜行日帰りは強い。往復十時間(休止共)

はかゝる。降りた晩は畳に寝て、翌日は

清水越(峠からは土樽、土合双方へ出ら

れる。但し土樽は七ツ小屋、蓬峠経由)

して帰京がよい。六日町には温泉宿もあ

る。

見どころ。頂上附近は高原状(どのルートをとっ

ても)で短い岳芝に囲まれた池塘が点

綴し、ノンビリと楽める。初夏、初中

秋を良しとす。

しばらく行くと右手に偽巻機の避難小屋が現  
れた。先刻の若者達は、こゝで中食をとると  
いつていたが、悪天候に追立てられて早々下  
山したのだろう。姿がなかった。こゝからゆ  
るい登りが偽巻機山頂に続く。清水から登っ  
てくると、この頭が本巻機をさえぎってしま  
うのでこの名前があるのだろう。降ってみて  
判ったが、こゝからの降路は、登路としては、  
二度と登りたくないような悪路である。根曲  
り灌木、雨とはいえ靴が埋まるまっ黒なドロ  
ンコ、それに続く黄粘土を雨水が刻んだ足巾  
丈のV字路は、歩くより滑足に近い。こんな  
悪路が偽巻機の頂上から約二時間続いたあげ  
く、最後にはゴロタ道が二十分もあって、ヤ  
ット桜坂の車道に出たときは、緊張からの解  
放と割引山から三時間ブツ続けの降りコース  
で、思わずよろめくほどの疲れが出た。  
桜坂の指導標前で丁度五時、約束の五時半  
には泉屋に戻れると、つくづく足許を見れば、  
ズボンも靴も我ながら愛憎がつきるほどのド  
ロンコで、まるで壁土をこねている箱の中か  
ら出てきたかと怪むほどの汚れ方だった。  
これが雨巻機の山行のなれのはての姿であ  
る。早く水に流したいと、うす暗くなった清  
水部落への路を急いだ。

近藤恒雄

毎年暮になると大晦から正月にかけて常連と山へ出掛けるのが習慣となつて居る。今年も亦昨年十二月三十一日から老童が六人若童が三人御堂平と云ふ地図にも書いてない妙な山へ出掛けた。大晦の身延の田中旅館は翌元旦の初詣りで女中共は全く戦闘態勢である。

例年の通り伊勢の津から馳せ参した銀行のK頭取持参の本物の伊勢海老の御馳走に四十三年掉尾の大宴会となり翌元旦それでも朝早起きして椿草里と云う部落に着いたのが九時少々前であった。目指す御堂平は何処にあるのやらさっぱり分らない。土地の人も元旦の屠蘇の為めか云う事がさっぱり分らず大体の見当で登り始めた。是れからが大変であつた。

御堂平の頂上に一行が勢揃いした(と云うと勇ましいがヘトヘトになって)時は既に夕方である。密集した茨に囲まれた御堂平である。

夫れから稜線に沿って熊森山に出て下部峠に下り猪の頭県営鱒の家に着いたのが夜の十時少々前と云う理である。老童の内に元気なのは新潟県村松から参加したK君位なものだ。

それでも翌日は本栖湖畔の島帽子岳に登り三日には女坂から王岳に登って富士山を満喫し御殿場径由大磯に帰った。新年早々「夜道の守」と謂う理であつたが年度中は左記の通り平凡な山旅が続いた理である。

同行 一月①御堂平、島帽子岳、王岳、(村尾親子、藤島、川喜田、)

②陣場山、景信山、(中川、佐野親子、山本健、中村、佐藤、)

③天丸山、(村尾)

二月 三頭山、(村尾、佐藤久一朗、黒川正博)

三月 明神ヶ岳 (村尾、藤島、望月、川崎精雄、佐藤勉、坂)

四月 雲取山 (村尾、藤島、坂本)

五月 田代山 (村尾、藤島、川崎、山田哲郎)

七月 荒沢岳 (村尾、深田久弥、五十嵐高志)

九月 仙丈岳 (村尾、柿原謙一、全和夫、坂本)

十月 三方岩岳、野谷荘司山、妙法山 (村尾、湯原忠政、真田)

十一月①無雙連山、蕎麦粒山、板取山、沢口山 (村尾親子、藤島、望月、高田晴男)

②飛龍山 (村尾、藤島)

③金時山 (箱根) (家内、坂東夫妻)

④伊那谷、清内路峠、妻籠、木曾田立の滝 (村尾)

十二月①矢筈山 (村尾、藤島、小林重吉)

②鳥居峠 (中仙道) (村尾親子、藤島、沢田、黒柳)

右の様な次第で合計十六回、登行標高計算は一七六〇九米突、登った山二十四、越した峠十七、となつて昨年より減つて居る。

同行者も調べて見たら村尾君と十三回、藤島兄と八回を筆頭にして合計三五名の人々と山へ登った事になる。内十一名は初めて同行した方々であるが皆んな古い友人の様な気がして居る。

十二月最後の鳥居峠はそれから藪原に出て藪原山荘に泊り(新たに笠原、川喜田両兄が参加) 翌元旦は再び奈良井に出て駅からテクテクと(乗物が正月の為め全然ない) 兵衛峠を目指して一路邁進、雪の峠は南アルプス特に甲斐駒、鋸、仙丈岳等素晴らしい眺めを満喫して平沢部落に下りたら日が暮れてしまった。伊那市からタクシーを呼んで高遠に出る望仙荘に其の夜は泊り二日は三峰川沿いに廻り女沢峠から伊那富士に登った。右を見れば、南アルプスの白峯に只目を見張るばかり頂上で心ゆくばかり山頂を楽んで往路を下つて浦部落の交野武一君に邸に其の夜は泊った。交野君の心の籠った接待に一同大喜びで楽しい正月の山旅を終えた。

一九六八年

十二月三十一日～一月三日 身延―椿草里―御堂平(△、六三四m)―熊森岳―下部峠―猪之頭―白糸―本栖―鳥帽子岳―精進―女坂―王岳―鍵掛峠―根場―河口湖(全行、藤島敏男、近藤恒雄、村尾金一、同息、笠原藤七、川森田太郎、松本義夫、黒柳満義)

御堂平の上りは途中から径なくなり藪をこぐ。下りも熊森岳との鞍部までは径なし。熊森岳の頂上では完全に日がくれ、富士宮あたりの燈火が美しく、月光を浴びた富士の雪が妖しく光っていた。元旦早々十三時間以上の山歩きにしごかれた。王岳は先年積雪深く途中から引き返した山だが、頂上附近は御坂山塊では随一のいゝところである。

一月十八日～十九日 札幌へ出張した機会に足を伸ばしてチセハウスまで行き、チセヌブリへ登って久々にスキ―の山を楽しむ。(全行、曾て在札中友人となった女性岳人六名と。)

三月二十一日～二十二日 湯西川温泉の近くの明神岳へ登ろうと、藤島近藤、村尾、川崎精雄氏らに佐藤勉君らの全行で出かけたが、時ならぬ多量の降雪のため断念、川精と帰京。

三月二十三日 まだ休みが残っているので一人で丹沢の大群山へ簗沢から大越路を徑て登り長者小屋へ下る。積雪三尺、雪につままれた山はこの辺でもいゝと思つた。

四月十三日 一人で上野原から―古沢―安寺沢―厳道峠―神野―奥牧野と歩く。こんな所は終日殆んど登山者に逢わな。

五月二日～六日 越後村松―上杉川―クシの峰―七郎平―銀次郎山―銀太郎山―五剣合岳(往路を戻る) 全行村尾文子、笠原藤七氏。五剣合岳は標高僅か一八八mだが、この附近はまだ完全に厚い残雪にに蔽われ、七郎平では猫額の裸地にテントを張った。人気のない越後のかくれ山々

と、タムシバの白花を賞した。カモシカにも出会う。上杉川の老獺師貝沼松二郎が全行。

八月三十日～九月一日 会津田島から湯ノ花温泉に泊り田代山へ登る。(単独)。

九月十三日～十五日 会津田島から湯ノ上を徑て江戸時代の宿場の形を残す大内部落を訪れ、大内峠を会津本郷へ越え(泊)、上三寄から桑曾根を徑て大戸岳に登り若松へ下る。(全行、藤島、山滝清次郎)

十一月一日～三日 千頭の奥の青部から無双連山に登り(泊)、上長尾を徑てソバ粒山、板取山、沢口山と尾根通り上下して大間のサヌ温泉に下る。(泊)。途中黒法師がよく見え、また沢口山附近にはシカのヌタ場が所々にあった。(全行、藤島、近藤、村尾文子、高田晴男)

十一月二十三日 初鹿野から曲沢峠、大谷ヶ丸を徑て滝子山に登る。三十年振りである。伐採がすすみ、昔森林であつた所がまる裸かになつていたのに心をくらくする。(全行、川精)

一九七〇年  
一月二日～三日 小鹿野―日向―茅ノ坂峠―森戸―坂丸峠―万場―滝不動―東ミカボ山―西ミカボ山―万場(全行、川精他)

十年ぶりでミカボ山に登る。たゞ茅ノ坂峠、坂丸峠、滝不動などは初めてである。  
一月二十五日 五日市から柏木野を通過して生藤山に登り上野原に下る。下山の途次、佐野川の奥の路傍にあつた道しるべをかねた野仏に、右さの川道、左ひの原、みたけ道、享和三年とあり、この道が旧幕時代から、桂川筋から檜原林や御岳参詣に用いられていたことを知る。

(全行、川精)

# 明治六九年の山行記録

保孝一郎

三月十九日(二十一日) 八方尾根スキー・ニゲルンまで。帰途神城駅で車中より山本健一郎君と挨拶をかわす。

四月十七日(?) 子供のいる全寮制秋川高校に面会に行くのに、高尾山の桜見物をして、小仙峠より高尾駅を径て八王子駅よりタクシーで行く。花は少し遅かった。

四月二十三日(?) 家を朝十時頃出て、デパートですし弁当を買い。大山に行く。山頂着二時すぎ。この弁当をたべてから、二時四十五分より広沢寺温泉まで山下りの一人歩き。六時頃のバスをつかまえて、渋谷駅に帰れば周辺はデモ騒然。途中で蘭のような花が印象的でした。

五月十四日(?) 奥多摩大岳小舎着二時すぎ。遠足の中学生がワイワイと立ち去って行った。時間がたいから山頂行きはやめて三時すこし前から鋸尾根径由永川に発つ。小舎番は小生の白髪頭を見て、気をつけて行きなさいと声をかけてくれた。これもまた一人歩き。

五月二十一日 栃寄より御前山に登るべく永川からバスにのる。今日も快晴の一人歩きと思つてバスを降りると、青年が一人降りて同行した。話をきくと、早稲田の学生S君で紛争中のため山にきたとの

こと、彼が以後の山行の良き伴侶となった。栃寄部

落のうえて道に迷い一時間ほど空費して、栃寄の大滝を見そこなった。奥多摩ぐらいと思つていても、

取付きで間違ふとは情ないが、部落付近の道がかえ

つて分りにくい。部落におりても好天のため野良仕事で空家が多く、やっと主婦をさがして道を教わる

始末。そのかわり山頂までは二人だけの静かな山行

で、頂上付近にすればさすが奥多摩週日でもかなり人は出ている。帰途は大ダワ峠より少し下ると工事

中の車道に出て、間もなく村役場のライトバンに乗せてもらい、途中神戸岩を見物して予想外に早く五日市駅に着くことができ、子供の寮に寄ることもできた。これでヒイツチ・ハイクの味をしめた。

七月八日(?) 寄越(ヤドロキコシ) 沢を径て鍋割山に登ろうとS君と約束して下北沢駅で待ったが、

姿が見えないので道了尊径由箱根明神岳登山に変更した。霧深い高原状の山道を一人鶯の声になぐさめ

られて辿るが、尾根筋には頂上らしい顕著な突起は、霧の晴れ間を握り飯をたべながら確認しようとした

がない。自動雨量計の先の突起を頂上として、地図のないためもと来た道を帰る。頂上付近は高原状だ

が箱根側は断崖で、その下から霧が道了尊側にたえず吹き越してくる。晴なら箱根側の別荘分譲地でも

見えてがっかりするのだから、一人歩きなだけに孤につままれたような印象が残る。

七月十五日 S君は前回遅れたため一人で丹沢水無川を散策したそうだが、この日新宿待合せを確約

して寄越沢径由鍋割山に行く。バス停からミロク山荘の乗用車、さらに垣根工事の軽トラックにとりまく乗りつぎができて早くとりつけた。雨山峠との分岐点より鍋割峠への路は昭文社の地図に出ているが、藪こぎがひどい。眼鏡のつるが落ちてくるので、推して知るべしだ。小生も眼鏡をはずして、潜るようにして歩くこと小一時間峠に着いた。苦勞しただけに人の賑う大倉尾根あたりとは違う雲囲気である。この路よりかえって沢をつめた方が楽に行けると思われる。

峠より一ピッチで頂上着。今日はお盆の中日のので一時間ぐらいの休止中に、二、三十人が離散したが、我々のコースを来た人、行く人はいないようである。帰途は後山乗越を径由、ミズヒ沢大滝見物をする。永い梅雨季も今日あたりで終りそう、午後からだいぶ暑くなったので滝はまさに天然クーラーだった。勘七沢出合いの少し下より車道となり、自動車一台停車してあり、少し歩き出したところでこれが下つてきて渋谷駅近くまで便乗させて貰った。今日は往復ともうまく便乗できた。

七月二十九日・三十日 またS君と誘い合せて、

八ヶ岳赤岳に行く。初日鉾泉泊。鉾泉には田舎の分

教場ぐらいの大きな建物があって、ここに地元高校生が集団登山に来ていて、えらく賑かである。往路

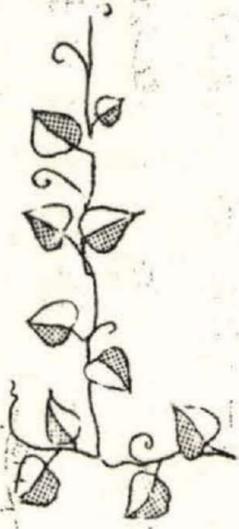
美濃戸口バス停までタクシー利用、その先は行ってくれなかったが美濃戸口の南沢北沢分岐点まで不完全ながら車道で山小舎荷上げ用の自動車が入ってを

り、ちようと一台美濃戸山荘わきに駐車していたが、便乗申込みの声をかけようと思ううちに発車してしまった。赤岳山頂に小舎のあるのは兎も角、三角点わきにジューズ、コーラの売店があるのは興ざめである。北八ッ岳に縦走するS君とは石室でわかれ、行者小舎徑由南沢を一人で下る。

九月十三日〜十五日 懇親山行参加。

十月十四日・十五日 またもS君を誘って日原本谷大ダワ林道徑由雲取に行く。永川よりタクシィーで名栗沢あたりまで行ける。唐松谷への分岐点まで徒歩二〇分、とりつきは楽になった。紅葉には少し早い、好天の登山日和である。長沢谷出合いに後採小舎があるだけで、奥多摩には貴重な静かな山路である。しかもこの小舎の上が少し急な登りだけで、あとは緩い勾配で、山から遠ざかった老体には絶好の体調回復自然療法の遊歩路である。しかしここでもチェーンソーの音からは免れなかった。(雲取小舎でもこれを使用しているから已むを得ないかも知れぬが)。

雲取小舎のストープと小舎番氏の人柄はよい。翌日山頂で三峯に行くS君と分れるが、連れが二パイター四人できて、鷹ノ巣巴ノ戸谷林道徑由日原に帰着。



### 瓶が森

岡田健志

一八九七メートル。四国の石鎚連峰中では男性的な石鎚山(二九八一メートル)と並ぶ高峰で、頂上近くの南西面に氷見二千石原と呼ばれる。美しく美味しい水と立枯れた木(白骨と呼んでいる)の点在する広大な笹原を有する女性的な雰囲気漂よわす山である。

四国の山が町から近くて日曜日など独身寮の暇を持て余している連中と語らって出かけるのに都合が良いということは、会報の復刊第二十三号で書いたとおりであるが、この瓶が森もそのような山の一つである。

瓶が森という名の「森」は「山」を意味するといふことで四国には石鎚山系だけでも、堂が森、黒森等、山の替りに森が使用されている山名が多い。このことは、山の中復近くまで南方情緒のあるシユロの木が見られるというように、山自体が森のように木に埋められた亜熱帯的山容に由来すると思われるのだが、不幸にして権威ある説には出合わなかった。

加茂川の清流育ちの美人の産地西条市からバスで一時間半。瓶が森の登山口東之川部落は山村という名にふさわしい村で山のかなり高い所まで畑が続いている。道はこの段々畑の間のジグザグ道をしばらく登り、東之川沿いに氷見二千石原の真中まで約三

時間。急な登りの上、夏ならば木々の間を吹く風も殆んどなく。日中の登りには大汗をかく。

樹林帯をすぎ、明るい笹原が近づく氷見二千石原で、小屋も近い。氷見二千石原はその名が示すとおり、所々に四国しらべ、樅等の灌木の散在する緩やかなスロープの笹原でスキーを楽しむのにもってこいの場所だ。

登山といえは体力的、精神的に安全限界一杯まで実行しなければ満足しなかった学生時代の山行にくらべ、この瓶が森を含めて、四国での山行では、充分な余裕を持った楽しい山行を経験すると同時に、南北アルプスの素晴らしさを以前に増して意識させたものである。



# エベレスト便り

## 第二次偵察隊

中島

寛

昨日、〇三(六五〇〇米)からベース、キャンプに下ってきました。六日の運動だったので、ベース・キャンプでの休養は実にうれし。しかし、ベース・キャンプといっても、五四〇〇米という高さなので、アンデスのときのように、また、一昨年のロツシユ・ゴルがそうであったように、心む緑も、思わず顔をつけたくなる美しい小川もあるわけではありません。石ころだらけの荒れ果てたところ。時々ロー・ラヤプモリから雪崩が落ち、その響きで眼りからさまされるときさえあります。先日、一九六三年のアメリカ隊で、セラツクの崩壊により遭難したまゝ行方不明だったジョン・E・ブライテンバックの遺体を、六年ぶりに、氷河末端で偶然見つけました。佐藤之などは、ジエイクの死んだ年が彼と同じ二十七才だったことで、感慨にとらえられていました。私たち隊員とシエルバでささやかな葬式をしてあげたのですが、たまたまベース・キャンプを訪れたタンポチエ寺院のヘッド・ラマにお経を読んでもらいながら、あゝ、ここは花一つ供えてあげられないところなのだ、とそのことばかりが妙に

気になって仕方ありませんでした。

それでも、ベース・キャンプは楽しいところです。例え石ころだらけでも、ここでの朝の目覚はさわやかです。今日はヤクの肉をひき肉にして、昼はハンバーク・ステーキ、夜はコロッケをたらふく食べることができました。それに日本からの手紙、スキー隊が着いて、酒をくみかわしつつ、楽しい語らいの機会ももつことも出来ました……。九月十六日にベース・キャンプをつくったときは、一体こんなところに二ヶ月も生活したらどうなるかと思いましたが、今では、まさに『帰るべき場所』になりつつあります。コミュニティというものは、きつとこういうものなのかもしれないな、と考えたりしています。

日本を出てからも二ヶ月近く、アイス・フォールにルート工作を始めてからも二十日になります。お蔭様で非常に元気です。二つ、三つ若がえったのではないかと思うほどです。いくらかは悲壯な気分が羽田をたつたのに、山へ入れば山のルールに従って、よく食べ、よく寝、よくキジを打ち、食糧が足りなければ、そこいらに生えている草をてんぷらにし、つまらないことにも腹を立てて、真剣に議論し、しかし、すぐに忘れ、肉体的には、学生時代の感覚をとり戻しつつあるようです。しかし、こんなことをやっている

だんだん東京でのビジネス・ライクな生活には適応できなくなってしまうかもしれません。

十月七日には小西、植村両君と〇三を出て、ウェスタン・クームのどんぶりからはじめに南壁にとりつき、約七〇〇米地点まで登りました。四十五度位の氷壁でけっして手がつけられないようなところではありませんが、とにかく、でかいなあ、と思いました。

二〇〇米登るのに、約四時間かかったのですが、登る前は、一時間もあれば何とかなるかも知れないと不遜にも思ったほどでした。ここまで来ると、すべてが大きすぎて、高さや長さの尺度が完全に狂ってしまっているのです。けっして甘く見ているわけではないのですが、エベレストが果して世界一の山かと、夕暮れのウェスタン・クームにたえずんで、ふと疑問さえ感じるほど、それは、見る山としては小さいのです。

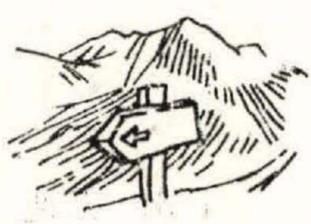
ウェスタン・クームのどんづまりは、この世のものと思えないほど静かで美しく、切ない気持ちにさえなりますが、ここから見ると、エベレストは奥穂で、サウスコルは白出のコル・ジエネバ・スパーはザイテン・グラードと見てもさほどおかしくなく見えるのです。そういえばローツエは潤沢岳、ヌブツエは北穂と考えてもおかしくありません。いい景色です。ところが、ふところに入ると、どうにもなら

新入会員紹介

ない、糸で縛りつけられたように、その大き  
さにくるめとられてしまします。そうやって、  
スイス隊などは、一九五二年秋に、十一月十  
日まで頑張つて失敗した記録を残しています。  
私たちも、仮に一〇〇米ずつかせいでいけ  
ば、頂上まで二十一日、今回の偵察の目標で  
ある八、〇〇〇米までは十三日、とにかく石  
屋になつたつもりで、コツコツ気長にやっ  
ていく他ないなど、皆で話しています。ルート  
もほゞ確定して、八、〇〇〇米までは上がV  
字状になっている氷壁といった方がふさわし  
いルンゼの中にルートを求める予定です。し  
かし来年の本隊のことを考えると、その上の  
三〇〇と四〇〇メートルの高距をもつ岩壁の  
どこにルートを求め、それをどうこなすかが  
成否の鍵を握っていると思われ、今回の偵察  
で、出来ればその目途をつきたいと、僕自身  
は考えています。一応十月二十日から二十日  
間の予定で、本格的に南壁にとりくむ予定に  
しているのです、十一月のはじめには大体の結  
論が出ると思われませんが、手にする氷、岩の  
一つ一つが、未知のものであることをひしひ  
しと感じています。精一杯やって、何とかい  
い成果をあげたいと思つていますがどうなり  
ますか。十一月末には帰国しますが、お会い  
出来るのを楽しみにしています。

時々、帰つたらおれは何が出来るかな、と

行末のことを考えますが、全く板につきませ  
ん。ただ食うだけの金を稼ぐことはできるか  
もしれないが、"いい仕事をした"といえる  
ような何かを身につけなければいけない年令  
にきていることを痛感します。そういう面で、  
帰つたら、いろいろ相談に乗つて下さい。  
女房が何か頼むようなことがあるかも知れ  
ませんが、一つよろしくお願いします。あま  
りに忙しく、わがまゝを通して出てきてしま  
いましたが、こちらにきて、家庭というもの  
の重味が少しづつわかってきました。気楽な  
もんだ、と思われれるかも知れませんが、それ  
が実感です。多くの人々の肩の上に乗っか  
つて、今自分がいることを、重荷としてでな  
く、実にうれしく自然に感じられます。



四十四年三月卒業

○俵 昭君 (経・種瀬ゼミナール)  
勤務先 住友電工 通信事業部  
業務課

住 所 横浜市港北区箕輪町一五二  
住友電工 日吉寮  
(〇四五―八五二) 二二八―

○藤原 朋信君 (経・種瀬ゼミナール)  
勤務先 住友金属工業 東京本社販売調整課  
〇二一(二二二)〇二二―

住 所 千葉県船橋市西船一―九一七  
住友金属 誠之寮

四十五年三月卒業

○宮武 幸久君 (経・種瀬ゼミナール)  
勤務先 旭硝子 営業部  
住 所 国分寺市東元町三の七の二

# 会 員 の 山 行 表

(順不同)

氏 名	年月日	行程の大略	同行者	備 考
柿原 謙一	1969			
	2. 6~ 8	志賀高原スキー行	会社の青年と一緒に	一ノ瀬ですべる
	3.19~21	赤倉スキー行	長男・長女	長女の大学入試パスを祝ってスキー
	5. 4	秩父の二子山	会社の連中と一緒に	
	9. 2~ 3	雲取山	長男と2人で	年中行事ですので
	9.14~15 9.21~23	瑞牆山 仙丈岳	針葉樹会行事 村尾、近藤、長男と	ペンちゃんにさそわれて、高遠から
10.24~27	湊沢岳往復	長男、長女とともに登る	新雪で美しかった。槍を眺めて下山	
12.29~31	志賀高原スキー行	長女をつれて	一ノ瀬ですべる	
石 弘光	1969			
	1	上越スキー		
	2	妙高スキー		
	4	八幡平ツアー	南 克進	
	8	白馬三山	山田亮三他	
	11	天城山		
1980				
1	上越スキー			
村尾 金二	44			
	1. 1~ 3	身延-御堂平-本栖-パラマ台-精進-女坂-王岳-根場	近藤恒雄、望月達夫(外6名)	( )内は針葉樹会員でない人
	1.24~25	万場-兵名郷-天丸山-万場	近藤	
	2.22~23	数馬-三頭山-氷川	近藤(外2名)	
	3.21~23	鬼怒川-湯西川-高手-鬼怒川	近藤、望月(外6名)	
	4. 5~ 6	氷川-三条の湯-雲取山-氷川	近藤(外2名)	
	4.26~28	上高地-西穂独標-上高地	小林重吉(外2名)	
	5. 2~ 5	新津-村松-五剣谷岳-村松	望月(外2名)	
	5.17~19	鬼怒川-湯の花-田代山-湯西川	近藤(外3名)	
	5.24~25	日光-霧降高原-日光	(13名)	
6.20~24	喜多方-弥平四郎-飯豊山-門内岳-泡の湯-玉川口	(10名)		

氏名	年月日	行程の大略	同行者	備考
	44 7.19~21 9.21~23  10.9~12 11.1~3 11.14~15 11.29~12.1 12.20~21 12.31	小出-荒沢岳-小出 高遠-仙丈岳-高遠  金沢-鳩ヶ谷-三方岩岳-中宮温泉 金谷-青部-板取岳-寸山峡-井川 塩山-将監峠-飛竜山-丹波 飯田-妻籠-木曾田立の滝-名古屋 伊東-矢筈山-伊藤 奈良井-鳥居峠-蕨原	近藤(外2名) 近藤、柿原謙一 (外2名) 近藤(外4名) 近藤、望月(外3名) 近藤(外1名) 近藤 近藤、小林(外1名) 近藤(外6名)	
鈴木 肇	44. 2 7 12	白馬スキー行 高瀬川慢歩 蔵王スキー行		
岩崎 利一	44. 2.18~21 4.9~10  6.5 9.3~4  11.26~27  45 1.20~21	八方尾根スキー 三輪山、吉野、宮滝  秩父-志賀坂峠-万場 三国山、籠坂峠  湯の山、御在所岳  足柄峠、金時山	娘 悦子他  妻 晴子	万葉の世界未だ健在 (ドライブ) 狭霧這ふ花野に道を尋ねり 山腹の奇岩、山頂の広淵、好コントラスト 金時娘健在 5月頃のつつじは素晴らしい
中川 孫一	1.19 晴 3.23 快晴 5.4 快晴  7.24 晴  8.22~23 晴、ガス 9.14~15 晴、ガス 10.11 ガス 11.2~3 曇、ガス	陣馬山-景信山-小仏峠 大山・ヤビツ峠-山頂-日向薬師 鹿留山・下吉田-明日見杓子-頂上-北側藪漕 北八ツ天狗岳・蓼科ビレッジ-白駒池-頂上-波ノ湯 鳥海山・象溜-外輪山-頂上-河原宿-吹浦口 瑞牆・天狗山・菲崎-山荘-頂上-信州峠-天狗山-秩父 巻機山・清水-割引沢-割引山-巻機山-檜穴段-清水 檜丸・筆沢-つつじ尾根-頂上-イタ沢 舎小屋-東野-橋本	近藤他若手会員 独 行 " 松本(級友) 冠木 柿原、山田他若手会員 独 行 "	トン汁・燗酒 残雪タップリ 喬木に囲まれた閑寂境 西天狗が良かった 当日快晴、翌日ガス 針葉樹会の敬老日山行

氏名	年月日	行程の大略	同行者	備考
	12.14 快晴	爪山・静岡ー平山ー頂上ー平山 (別ルート)	三郎(三男)	展望360° 新雪富士
日江井 正己	44 6月下旬 7月下旬  8月下旬 9月下旬	乗鞍ー上高地ー八方尾根 御岳ー木曾駒  白馬岳 尾瀬ー三平峠より 白馬を除いて他は全部車利用 86才の老父と一緒にでは致仕方なし、御岳頂上小舎では86才の御蔭で小舎代は割引してくれた。 白馬では日頃の不勉強がたゞり、すっかりグロッキー。	多数	老父の案内 王滝口より往復、木曾駒は伊那側よりロープウェイ利用 会報通り 老父と共に
吉沢 一郎	44年8月	磐梯山(1,819m)ー湖水全部車ー 奥只見田子倉湖ー駒止峠ー若松	会社の女子社員 (多数)、後半は 日本山岳会福島支部の人々。	岩魚1メートル未満のを何尾もとる。
加藤 正己	44. 2 3 " 4 5 6 8 9 10 11 12 45. 1 2	御在所岳藤内壁 神城スキー 八ヶ岳(硫黄岳、横岳) 御岳山 中央アルプス越え 藤内壁、一ノ壁 富士山 南八ヶ岳縦走 八方尾根(唐松岳まで) (琵琶湖近く)高室山 中央アルプス(登れず) 御岳山 八ヶ岳・南部一周	ナシ 山田、山本、中村 ナシ 4人 1人 ナシ ナシ 4人 2人 2人 大橋 大橋、中村 1人	
高崎 俊平	1969 1. 1 2 3 4	有明ー合戦小屋 小屋ー燕山荘ー大天井岳 大天井ー常念小屋 小屋ー常念岳ー蝶ヶ岳ー横尾	佐藤久尚(41年)	連日風雪のため後半のラッセルに苦労した。

氏名	年月日	同行の大略	同行者	備考
	1. 5 8. 30 31	横尾-上高地-松本 東京-甲府-広河原-大樺沢の二 股テント場 北岳を大樺沢経由で往復-帰京	会社の同僚3人と	
大賀二郎	69 2.11 3. 2 3.20~22 5. 3 10.10~11 10.12 12. 3 70. 1. 28 69. 6. 28 9.14~15 11.	御在所岳 石打スキー 蔵王スキー 浅間山 白那山 恵那山 南志賀スキー 苗場スキー 法師温泉、三国峠 瑞牆山、天狗山 弥彦山	大橋、木村 会社関係 高崎 単独 山田、大橋、木村 " " " 会社関係 "、高崎 高崎 コン親山行 三股	
大建二郎	44 9.3~7 5.1~5 1月末	鹿島部落-鹿島槍-赤沢岳-スバ リー-針の木岳-大町 茅野-横岳-北八ツ天狗岳-松原 湖 発哺-奥志賀-焼額山-竜王越え ツアー-小丸山スキー場	会社山岳部員4名 会社山岳部員3名 会社スキー部3名	8年ぶりの鹿 島のんびり旅行 今シーズン3 パーティー目 とのこと
高橋要二	69 10. 26 2 27 28	大阪-名古屋-上田-美ヶ原 バス (山本小屋) 美ヶ原(高原荘泊) 高原荘-松本-長野-木島-野沢		8時のこだま で名古屋へ、 中央線の車中 展望、夕頃山 本小屋着 霧雨、滞在 快晴、半日散 策、下山する のは惜しい天 気、40年ぶ りで酒屋旅館 を訪れる。環 境の変貌は驚 ろく。 酒屋の当主は

氏名	年月日	行程の大略	同行者	備考
	10. 29 1969	野沢—木島—長野—松本—大阪		私達が世話になった女主人の孫であった。自動車で上ノ平辺りまで案内して貰う。
岡田 健志	4.29~5.3 12.30~1.1	爺岳南尾根—冷池→鹿島南峰—赤岩尾根 遠見尾根→白岳小屋 小出—駒ノ湯 → 越後駒ヶ岳	1人 依 昭氏	
中島 寛	12/30~ 1/7	明神合宿 天候悪く、12/31 5峰東南稜に登ったのみ		
	5/2~5/5	○鹿島槍 北股本谷から登頂 ○赤岩沢から蓮華岳登頂	なし	
	8月~11日	エベレスト第2次偵察隊		
	12/2~3	富士山(御庭から登頂吉田大沢に下る)		



# 会務報告

(昭和四四年九月、四五年五月)

大賀 二郎

## 秋の懇親山行

昭和四四年九月七日(日)  
予備調査 大賀、竹中、齊藤正

昭和四四年九月十三日(土)～十五日(月)

場所 瑞牆山・天狗山

参加者 中川孫・柿原、山田、久保、原田、山本尚、有賀、大賀、三森、竹中、齊藤正、小島、山本、以上十三名。

## 鈴木克夫会員出火お見舞

昭和四四年十二月十六日

自宅が全焼、ご子息が焼死という痛ましい事故があり、会から弔電を打った。お通夜、告別式には、白川、甘利、宇田川、大橋、中橋、半場、臼井、加藤が参列。

## 忘年会

昭和四四年十二月二十日(土)

場所 如水会館

出席 中川、吉沢一、金田一、手塚、黒田、佐々木、岩崎、大塚、日江井、佐野、山田、久保、樋口、甘利、柴崎、岡垣、中村幸

丸山、中島寛、有賀、石、大賀、山本尚、高橋信、竹中、小島、佐藤之、佐藤久、平川、以上二十九名。

(一) エベレスト南壁試登報告・スライド映写  
中島、佐藤之。一同、その想像を絶したスケールに驚嘆。

(二) 名和君お見舞カンパ 久保さんの提案で、出席者から二四、五〇〇円のカンパを、竹中君らが積立て、いるファンドに組み入れ、将来名和君が自立するときの一助にしてみよう。

## 懇親スキー

昭和四五年二月十四～十五日

志賀高原で企画したが、参加者なく、流れた。

## 中島・佐藤君激励カンパ

昭和四五年二、三月 実施、協賛者 五九名、総額 二五五、〇〇〇円。

## 中島君エベレスト壮行会

昭和四五年三月五日(木)

場所 如水会館

出席 中川、吉沢一、河相、増山、鈴木英、柿原、望月、岩崎、大塚、日江井、佐野、久保、山田、伊藤、中村幸、中島寛、石、大賀、高橋信、竹中、小島、三森、佐藤之、佐藤久、平川、以上二十六名。

## 夏山のご案内

鏡平の小屋に集まりませんか。日程は一応八月二十二日(土)から二、三日間とします。が、休暇に合わせて、都合のいい日に来て下さい。鏡平は、双六岳の中腹で、根拠地になれば、笠は勿論、三連華にも、にも日帰り出来ます。参加される方は、五〇三―一八〇八 山田亮三 まで早目に連絡して下さい。

## 編集後記

悲しいことに、また仲間が一人減ってしまつた。六月二十九日の午后彼ら三人の上に何事がおこつたのだろうか。突然に、全く突然に、彼は我々の手の届かない所へ行ってしまった。二九日の夜から、続々と友人・知人が穂高へ入り、奥又へと登つた。しかし、そのときにはすでに、彼らは帰らぬ人となつていた。ただ、会員諸氏を含めた彼らの友人のなみなみならぬ努力で、すみやかに山を下ることが出来たが、せめてもの慰めであります。次の二八号を平川君追悼号とし、詳細を御報告するとともに、彼の冥福を祈りたいと思ひます。 黙禱。

(高崎)





